

金銭観の研究 序説

拝金主義と排金主義

浅 野 純 一

はじめに

お金は人間の知恵が生み出したもので、人びとの生活と深い関わりを持つ物である。しかしこのお金との付き合い方はなかなか難しい、嘗て、朝日新聞の投稿欄テーマ談話室で、「お金」を取りあげたことがあった(1988年9月)。8カ月の掲載期間中に寄せられた投稿数は、3,500余通に達したという。それだけ、お金は日々の生活にとって身近な存在であり、同時にやっかいな存在ということでもあろう。

次に紹介するのは、この投稿の中で、「お金が愛か」ということについて、考え方を異にする二人の意見である(文章一部省略)。

わたしゃ金より愛 26歳 主婦

コマーシャルに「わたしゃ愛より金が好き」というフレーズがあるのをご存じですか。恐ろしさと共に寂しさを感じてしまいます。私も結婚前は「お金さえあれば」と思っていました。でも結婚して子供が生まれてみると、お金は確かに必要ですが、それ以上に家族で過ごす時間や、夫婦や親子の愛情の方が、お金のまさっているような気がしています。

主人も残業をすれば手当はつきますが、それよりも早く帰って、家族だんらんの時間をたくさん持った方が幸せだと思うのです。現在、お金だけがすべてのような「金銭至上主義」がはびこりすぎてはいませんか。私としては「わたしゃ金より愛が好き」というCM

にうなづく人が多い世の中を夢んでいます。

愛より金の時もある 33歳 主婦

「わたしゃ金より愛が好き」に一言。私も結婚する前までは、お金なんかなくても、愛さえあればと思っておりました。子供が生まれて間もなく主人の転職、そのうえ主人の親のつまりきで、私たちの生活が大きく変わりました。

精神的にも金銭的にもどん底の生活になってしまい、「金より愛」なんて、夢みたいなことを言っではいられなくなりました。夫婦の絆さえ危うくなった時、やはりお金はなくてはならないものだと思い知らされました。生活する、生きていくということは、きれいごとではないのです。一生懸命生きていても、いろいろなアクシデントで、絆がどんどん壊されることもあります。

やっと親子四人のささやかな生活を送れるようになったいま、お金の恐ろしさとありがたさを、しみじみ感じます。早く「わたしゃ金より愛が好き」と胸を張って、子供に教えられるようになりたいと思います。

お金に対する考え方、接し方は複雑多様である。その一つが、お金さえあれば何でもできる、お金こそいちばん貴い物であるとする考え方(拝金主義)であり、いま一つに、お金は汚いもの、お金のことを口にするのは卑しいことであるとする考え方(排金主義)がある。

この相対する金銭観は、どのような背景から形成されてきたのか、また、これらのお金に対する

偏った考え方に対して、望ましい健全な金銭観とはどのようなものか、そして、清潔な金銭感覚を育てていくことの意義について考えてみることにしたい。

1. 金銭観の二面性

金銭に関しては古来多くのことわざ、格言が伝えられている。これらのことわざには、多年にわたる人びとの生活の姿や考え方が示されており、金銭に関して多くのことが言われているのは、人びとの生活と金銭との深い関わりを示すものにほかならない。

金銭に関することわざとして、次のようなものが一般に知られている。これらはいずれも金銭の威力の大きさ、金銭万能を唱えるものである。

地獄の沙汰も金次第
植の力は阿彌陀ほど
金が物言う
銭にまさる宝なし
金は町の人のお宝

また、ことわざとともに名言名句として伝えられる次の言葉もまた、金銭を貴ぶ人びとの気持ちを表している。

とかく金銀の光ぞ有難し(井原西鶴「好色一代男」)

金さえあれば何とでもなる遊里の実情を指摘した言葉。

人間よりは金銭の方がはるか頼みになりますよ、頼みにならんのは人の心です!(尾崎紅葉「金色夜叉」)恋人宮に裏切られた間寛一の人間への不信。

みんな金が欲しいのだ。そうして金より外には何にも欲しくないのだ。(夏目漱石「道草」)

健三が自分の周囲の人間を見て考えた言葉。彼は養父、養母、姉などから金をせびられている。

一方、金銭をいわば悪の根元とみなし、あるいは

これを阿堵物(その物の名を直接に言うのをはばかって、あんなもの、こんなものと呼ぶ)として避けようとする見方がある。

金はすべての悪の根元
金銭は徳義の毒薬
金が敵
お金と灰皿はたまればたまるほど汚くなる
小人罪なし、玉を抱いて罪有り

日本人は一般に、金銭の価値を認めつつも、金銭のことを口にしたり、金銭にこだわることは恥ずかしいこと、はしたないことと思う。代金を払ってもその明細書をチェックすることはしないし、釣銭を数えることもしない。また、金銭を裸のまま他人に贈与することには抵抗感を抱いてのし袋を用いたり、金銭の代りに商品券やギフトカードなどが使われる。金銭に対しては背を向け、面と向かうことが苦手といえるかもしれない。

2. 金銭観の形成

金銭観について相反する見方があることは、とりもなおさず、人びとの金銭に対して抱く微妙な心情を示すものである。日本人はとくにみられるこのデリケートな金銭観はどのようにして形成されてきたのであろうか。それは、長い間の経済的、社会的な生活環境の変化と共にかたち作られてきたという面があろう。また、それが本来日本人のもつ特性であるとして、比較文化や社会心理などの側面からも考えてみることができよう。

ここでは、これら広い分野に関わる金銭観の形成について、その要因とみられるものをそれぞれの識者の見解をもとに、いくつかの仮説として示してみたい。

(仮説1) 農業中心の経済社会が長く続いたこと

穀物を尊重して金銭を賤しむという「貴穀賤金」の思想は、農業本位経済の名残りである。江戸時代の中期まで、当時の農村社会はしばしば飢饉に

見舞われ、多くの餓死者を出していた。そうした状況下で、農業を立国の基礎とし、封建社会のイデオロギーとしての農本主義の思想と運動が広がっていった。この場合、金銭は賤しむべき対象であるに過ぎなかったのである(本庄栄治郎)。

(仮説2) 農村社会では金銭を必要としなかったこと

日本の農村社会では近代化が遅れ、貧窮化の中での生活はおよそ金銭とは縁遠いものであった。日常の生活は自給自足の経済生活で、生活必需品として外部から購入するものは塩、酒、砂糖程度であった。衣類についても綿や糸は自家生産でまかない、薪炭、肥料等も自給ということで、日常金銭を必要とすることはほとんどなかった。

また、「ムラ」という村落共同体にあっては、血縁、地縁の強固な相互扶助組織によって農作業が営まれ、労働の面においても金銭を必ずしも必要とはしなかった(河合悦三郎)。

(仮説3) 欲望を抑圧された封建社会が続いたこと

厳しい身分制の封建社会では、人びとの自由な欲望は固く抑えられ、それがその時代の道徳でもあった。一方、金銭による人間関係は、その自由と平等という性格から、社会秩序の破壊者とみなされ、この点では性も金銭も同様で、これをタブーとし、縛りつけることによって破壊力が社会全体に及ぶことを抑えた(中村光夫)。

また、儒教を倫理思想のよりどころとした武士にとって、生命への執着は許されないことであった。金銭利害のこと、男女の色情のこと、あるいは衣食住への欲望、遊興安楽のねがいごと、これらはすべて生命への執着にねざし、未練がうまれるものとして武士の口にすべき言葉ではなかった(相良 亨)。

(仮説4) 町人社会の興隆が金銭観を変えたこと

封建社会から近代資本主義社会への移行は、土農工に代る町人社会の出現を意味するものであった。その町人の世界をえがいた井原西鶴は、町人にとってもっとも必要なのは金銭であり、銀徳でできないことは天下に五つしかないという¹⁾そして「世間に欲しきは金銀なり」(男色大鑑)、「とかく金銀の光ぞ有難し」(好色一代男)、あるいは「金銀を溜べし。是、二親の外に命の親なり」(日本永代蔵)と記している。

また、「さてさて世に金もため程、かなしき物はなく候。偽も、けいはくも、悪人も、皆貧よりおこり申候」(万の文反古)と、金銭を積極的に肯定したのが、西鶴を通してみた町人社会の金銭観である。

(仮説5) ホンネとタテマエを使い分けること

江戸時代300年の抑圧された封建社会の中で、人びとはホンネとタテマエあるいは裏と表とを使い分けることが日常の習慣的行動であり、生活の知恵でもあった。抑圧された社会生活においては、タテマエが圧倒的に優位なかたちで表面に出てくるが、ホンネの部分は底流として表面に出ることはない。

金銭観についての二面性は、このホンネとタテマエ、裏と表との使い分けによるものであり、金銭に対してタテマエとして軽視し、退けようとする。しかし、表に出さない裏の部分では逆に金銭に対するフェチズム(呪物崇拜)がみられるのである(西村孝夫、土居健郎)。

(仮説6) 日本文化の特異性ということ

金銭や物に執着しない、物ごとに対して徹底性を欠く、あるいは執拗性がないなど、日本人の国民性ともいわれる。このような日本人の性格、感覚は、気候温暖で湿潤性に富むモンスーン地帯に

1) 西鶴が銀徳でできないことは天下に五つしかないと言っているが、この五つが何であるかの説明はない。これについて野間光辰は、金銀が万能に近い能力をもつことを強調するための修辞であり、強い五つとは何かというならば、生、老、病、死の四つの外に、町人の富裕と豪奢を嫉妬し、町人の金権を削ごうとする当時の政治的権力を最後の一つに数えていたのではなかろうか、と解説している(日本古典文学大系 48 西鶴集 下 p.465)。

において育まれた、日本文化の特異性によるものとは、かねて指摘されてきたところである（石田英一郎）。

執拗性のないことは淡泊性に通じる面がある。「武士は食わねど高楊枝」の心が、庶民層の間では「宵越しの銭は使わぬ」となる。粋なさばきを理想とし、野暮を申しむ心が、金銭を遠ざけることに結びついたとみられよう（宮本又次郎）。

（仮説7）金銭の魔性をおそれたこと

金銭そのものはもとより善でも悪でもない。しかしそれは人間を醜くしたり、悪の道に走らせたりする。金銭の魔力は時として人間の道義心を買占め、その人の魂を墮落させてしまうことにもなるのである（夏目漱石²⁾）。

「小人罪なし、玉を抱いて罪有り」というのも金銭の魔力を戒めた言葉であり、抵抗力のない子供に対してお金は汚いものと言いつけさせ遠ざけようとしたのも、金銭のもつ魔力をおそれたことであろう。

3. 健全な金銭観

健全な金銭観とは、金銭の価値や役割を正しく理解することであり、金銭を勤労の正当な報酬としてとらえることである。金銭を「命の親なり」、お金さえあればなんでもできるという考え方（拝金主義）も、お金は汚いもの、金銭を阿堵物として退ける考え方（排金主義）も、共に金銭に対する偏った見方であり、金銭の価値や役割を正しく理解したものとはいえない。

金銭は、「社会の横の広がりとしては人びとを結び助け合いの働きをし、縦の関係では現在と未来

をつなぐ大切な役割を果たしている」のである³⁾。

また金銭は、人びとが社会の一員として社会に寄与することによって得たところの正当な対価である。これを汚らしいものとして排することが誤りであるとともに、金銭を入手するのに手段を選ばないとするのもまた誤った考え方というべきである。

論語に「富と貴きとは、これ人の欲するところなり。その道を以てせざれば、これを得るも^お處らざるなり。」（里仁第四）とある。渋沢栄一はこれについて、「富貴は万人の欲するところである。しかしこれを得るのには道がある。正しい道を踏んで得た富は、永くその手に留まって、決して外に逃げてゆくものではない。」と講述している⁴⁾。

幼児（5歳児）を対象とした金銭感覚に関する調査⁵⁾によれば、「お金は働いて手にするもの」であることを子供が「わかっていると思う」と答えた母親は61.4%を占めている。そして、今の段階では「わからないと思う」けれど、お金は一生懸命働いてはじめて得られるものであることを、親として教えていくことが必要であるとする回答が67.4%（「自然にわかってくると思う」32.6%）に達している。

平成7年7月、東京において全国金銭教育協議会（貯蓄広報中央委員会主催）が開催された。全国から金銭教育研究校（園）教師が参加して行われた研究発表・協議の場で、ある幼稚園児の母親の言葉が紹介された。

「うちの子の場合、お金は銀行へ行っておろせば、いくらでもあると思っているので、たとえ1円のお金でも、お父さんが一生懸命働いてもらったお金であるということを知ってほしい。

2) 夏目漱石は、「私の個人主義」と題して学習院において行った講演の中で、次のように述べている。「金銭というものは至極重宝なもので、何へでも自由自在に融通が利く。……そのうちでも人間の精神を買う手段に使用出来るのだから恐ろしいではありませんか。即ちそれを振り回して、人間の徳義心を買占める、即ちその人の魂を墮落させる道具とするのです。」（漱石全集第11巻 p.453）。

3) 貯蓄広報中央委員会が、金銭教育の普及のために作成した冊子「こどもとお金」（初版 昭和56年5月）による。

4) 渋沢栄一は、論語講義において、「人は富を汚らしいものきたくないものであると視ず、正路によってこれを得るよう心掛けねばならぬ。富貴になれば、道徳より離れ遠ざかるごとく古人の考えたのは誠に間違っている」とし、自らは「片手に論語、片手に算盤を振って今日に及んだ」と述べている（論語講義（二）p.22）。

5) 「幼児の金銭感覚と行動 5歳児を対象とする実体調査」豊橋短期大学研究紀要第7号 1990年。

また、お金を出せばなんでも買える時代だけでも、どんな物でもそれを作るのに、いろんな人の手間ひまがかかっている。だからこそ買ったものや自分の物を大切にしたい。そういう気持ちを通して、生命あるものにも優しい心のもてる子になって欲しい。」

お金に興味を持ち始める幼児の段階で、お金は汗の結晶であり、勤労の対価であると教えることの意義は大きい。それがわかることによって、お金や物を大切に、それを上手に生かして使うことのできる清潔で健全な金銭感覚が育っていきといえよう⁶⁾。

おわりに

「金銭は品行なり (Money is character.)」という⁷⁾。また、「金はよき召使い、悪しき主人なり (Money is good servant, but a bad master.)」ということわざがある。人間が生み出した金銭に人間が使われてはならない。金銭に対する真の主人公となってこれを使っていかなければならない。

ただ、金銭と人間との関係は複雑である。お金に対する心理・行動は、歴史、社会、政治、経済、あるいは宗教・倫理など多くの分野に関わっている。本論は、お金と人間との広く深い関わりについての研究序論である。

参考文献

- 明石照男 1952 三聖人の経済道徳観 龍門社
 朝日新聞社 1989 お金 日本人の金銭観
 石田英一郎全集 1970 筑摩書房
 江上波夫編 1989 民族の世界史2 山川出版社
 河合悦三郎 1956 日本の農業と農民 岩波新書
 近代日本思想史大系 1975 福沢諭吉集 筑摩書房
 大修館書店 1995 世界ことわざ大事典
 相良 亨 1964 日本人の伝統的倫理観 理想社
 サムエル・スマイル
 中村正直訳 1981 西国立志編 講談社学術文庫
 渋沢栄一 1985 論語と算盤 国書刊行会
 渋沢栄一 1977 論語講義(二) 講談社学術文庫
 小学館 1988 日本名言名句の辞典
 小学館 1986 故事ことわざ大辞典
 体系日本史叢書 1986 生活史 山川出版社
 竹内 宏 1982 お金のダイナミズム 講談社現代新書
 貯蓄広報中央委員会 1980 わが家の金銭教育
 貯蓄広報中央委員会 1981 こどもとお金
 土居健郎 1975 「甘え」雑稿 弘文堂
 東京堂出版 1981 故事ことわざ辞典
 中村光夫 1979 金銭と精神 日本書籍
 夏目漱石 1966 漱石全集 第11巻 岩波書店
 西村孝夫 1990 日本人の経済観念 啓文社
 日本古典文学大系 1960 西鶴集 下 岩波書店
 日本思想史講座 1975 近世の思想 2 雄山閣
 林 知己夫 1970 日本人の国民性 至誠堂
 本庄栄治郎著作集 1971 日本経済思想史 清文堂
 南 博 1994 日本人論 岩波書店
 南 博 1983 日本的自我 岩波新書
 宮本又次郎著作集 1977 第2巻 講談社

6) 日常身近にある物やお金の価値や役割を理解させ、その物やお金との関わりを通して人間性を育て、望ましい人格の形成をめざす教育を「金銭教育」と称している。貯蓄広報中央委員会(事務局日本銀行)が、その普及推進に努めており、金銭教育研究校の委嘱、全国金銭教育協議会の開催、あるいは啓発資料の作成など、運動は多方面にわたっている。

また、戦後間もなく発足した「こども銀行」も、金銭に対する正しい観念を身につけさせるための学校における教育活動の一環として、現在約1万余校で実施している。

7) 「金銭のことは決して軽忽(おろそか)に処理する(とりあつかう)ことなかれ、金銭は品行なり(Never treat money affairs with levity—Money is character.)」とはイギリスの小説家リットンの言葉として、サムエル・スマイルが紹介している(西国立志編, 中村正直訳)。